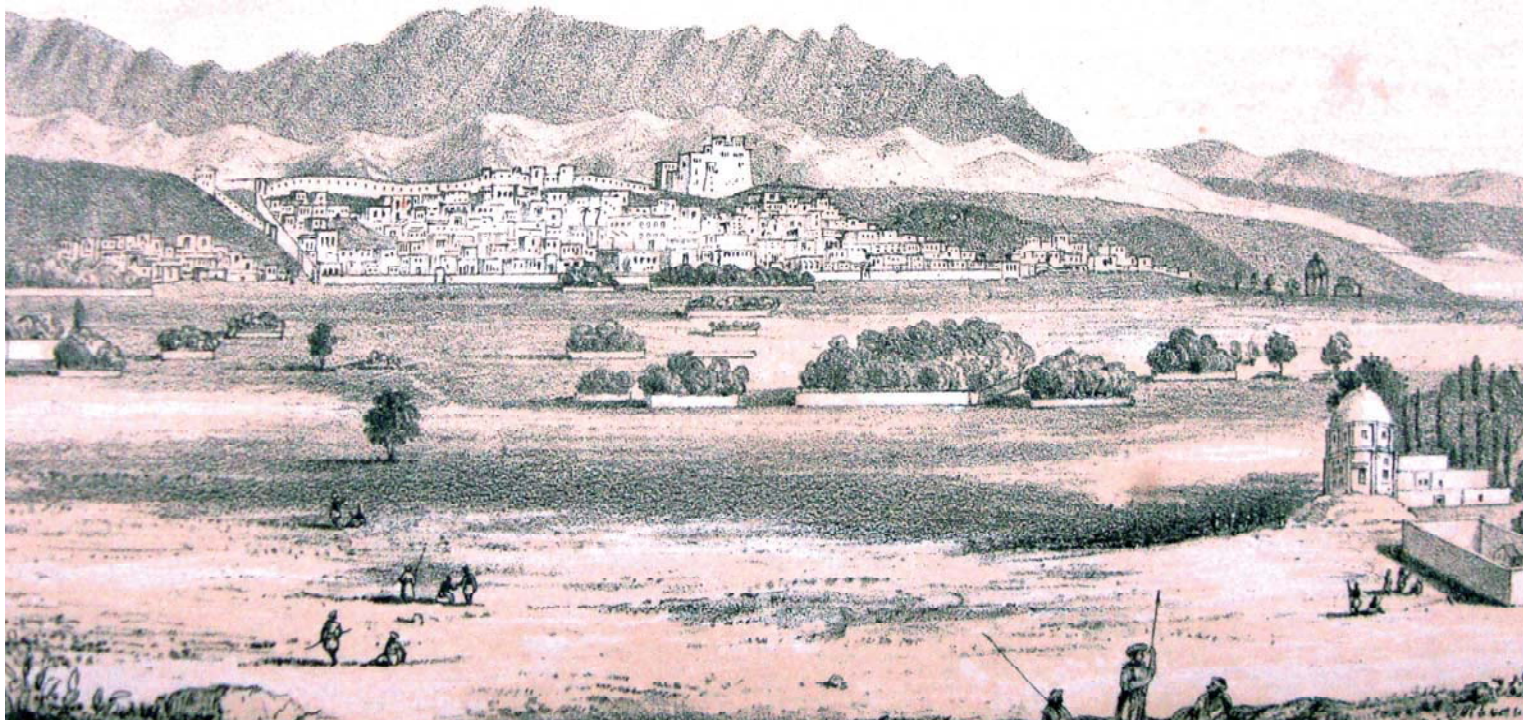


# M A S S O N

「マッソン」と名を変えた、ある男の旅行記



## 19世紀 バルーチスタン・ アフガニスタン紀行

1827年、帝国主義を迎えようしていたイギリス。

そのベンガル第一師団を脱走したイギリス軍人ジェームズ・ルイスは、  
アメリカ人旅行家「チャールズ・マッソン」へと名を変えて、西アジアへ旅立った。

現在もなお、第一級の史料とうたわれる

マッソンの旅行記に残されたスケッチをたどり、  
当時のバルーチスタン、アフガニスタン世界をめぐる。

2009

11/18～12/18

東京外国語大学

附属図書館

2F展示コーナー

展示ケース①

残された旅行記とアジア

『旅行記』

この言葉に、どんな感情が呼び起こされるでしょうか。



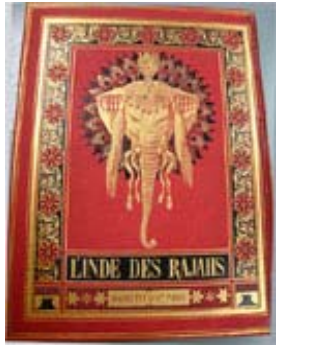
ロマン、躍動感、期待、それとも・・・。

古来人々は陸・海の東西南北を旅し、そして、その始終を描いた多くの『旅行記』が残されてきました。

著名なものではマルコ・ポーロの東方見聞録（A/292/536420）があり、紐解けばまるで当時の噂話が聞こえてきそうな生き生きとしたスケッチに出会うことができます。

そして 13 世紀にマルコ・ポーロがたどったアジアを舞台として、19 世紀、多くの『旅行記』が残されました。

(展示図版/書名/請求記号/図書 ID)

	<p>The tourist in Spain and Morocco / by Thomas Roscoe ; illustrated from drawings by David Roberts</p>	<p>HUB/K/599728</p>	<p>0000599728</p>
	<p>Life in Bombay, and the neighboring out-stations</p>	<p>HUB/K/577716</p>	<p>0000577716</p>
	<p>L'Inde des rajahs : voyage dans l'Inde centrale et dans les présidences de Bombay et du Bengale / par Louis Rouselet</p>	<p>HUB/N/569031</p>	<p>0000569031</p>

## バルーチスタン (バローチェスターン)

こうして数多くの『旅行記』の舞台として描かれた土地の一つが、アジアの東西交路の要衝である、バルーチスタン (バローチェスターン) です。

### バローチェスターン (バルーチェスターン) とは

バローチェスターン (イランではバルーチェスターン) とは、ペルシア語で“バローチ (イランではバルーチ) 人の土地”を意味する。つまり、現在このように呼ばれる地方には主にバローチ (バルーチ) 人が住んでいる。

#### □ 人口

信頼に足る人口統計があるわけではないので、推定の域を出ないが、パキスタンには、その一州を構成するバローチェスターン州を中心に約 350 万人、アフガニスタンのスィースターン・レギスターン地方に約 20 万人、イランには、その一州を構成するスィースターン・バルーチェスターン州を中心に約 150 万人、他に中央アジアのメルヴ地方に 1.3 万人、更には数世代前から続いている出稼ぎの結果、湾岸諸国やオマーンなどにいるバローチ人も相当数に上る。

#### □ 言語

言語学上、インド=ヨーロッパ語族のイラン語派に属するバローチ語を用いる彼らは、カスピ海沿岸地域から現在のバローチェスターンに移動してきたのではないかと考えられているが、定かではない。ただ、その過程でも、また現在の地に定着した後も、在来の多くの異質な集団と混雑・同化して現在に至っていると見てほぼ間違いないようだ。

#### □ 宗教

宗教的にはバローチ人の大半はスンニー派イスラーム教のハナフィー法学派を奉じているが、パキスタンのマクラーン地方には聖地メッカに向かっての礼拝 (ナマーズ) を否定し、集団による神の賛美 (ズィクル) を行うことからズィクル派と呼ばれる一種の異端集団 (彼ら自身は紛れもないイスラーム教徒であることを確信している) も存在している。

#### □ バローチ人以外の構成員

しかし、彼らバローチ人として、バローチェスターンで圧倒的多数を占めているわけではなく、他にドラヴィダ系の言語を母語とするブラーフイ人 (カラートを中心に約 80 万人)、パシュトゥーン語を用いるパシュトゥーン人 (クエッタ周辺地域)、アフガニスタン中央部から移住してきたハザーラ人など、実際の人口構成は多様である。従って、バローチ人とは、最も広い意味ではバローチェスターンに住む人々で、パシュトゥーン人以外の全てを指すこともある。或いは、もう少し限定的に、メドやダルザダ、ローリーといったいわゆる社会の底辺層の人々を除くバローチェスターンの住民という緩やかな意味で用いられることもある。

## □ 風土

バローチェスターンは、域内の気候条件は多様であるとはいえ、他の中東や西アジア諸地域と同様に、乾燥地帯に属しており、総じて降雨量は少ないこともあって、住民の生業としては、天水依存農業に加えて、地下用水路（ガナート、カーリーズ）を利用した灌漑農業が一般に行われ、ナツメヤシの他に、小麦・稲・もろこしなどの穀類、葡萄・メロン・スイカなどを栽培している。また、ヤギの飼育を中心とする牧畜も重要な産業であり、季節移動を特徴とする遊動（ノマディズム）も随所で見られる。

## □ バローチェスターンと民族問題

複数の主権国家のそれぞれにあっては少数派として位置づけられるバローチ人は、いわゆる民族問題の当事者でもある。パキスタンにおいては、インドからの分離独立後も暫くは自治が認められていたが、パキスタンへの完全統合（1970年）後は、反政府活動が活発化し、当時のブット政権に対する武装蜂起を引き起こすまでに至った。



イランでも、ドースト・モハンマドがレザー・シャーに帰順する1928年まではテヘラン政府から政治的自立状態を保ち続けており、その後も、度々中央政府との緊張関係は続いた。特に、イスラーム革命後の憲法草案審議の過程で、唯一のスニー派ウラマーでバローチ人の代表として参加していたモッラーザーデは、シーア派12イマーム派の国教規定とペルシア語の公用語化に反対し、革命政権と対立した。

いずれの地域も、目下のところ、表面的には事態の沈静化を見ている。

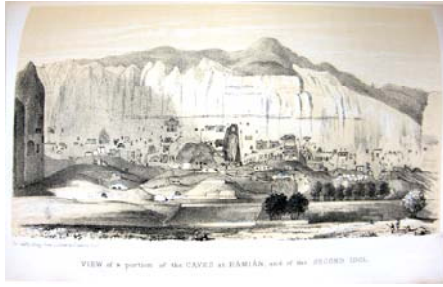
（東京外国語大学教授 八尾師 誠）

マッソンの『旅行記』

19世紀アメリカ人旅行家『チャールズ・マッソン』はこのバルーチスタン（パローチェスタン）とアフガニスタンを訪れ、数々のスケッチを残しました。

 <p style="text-align: right;">Vol.1 口絵</p> <p>参考資料</p> <p>Bosworth, C. E. "Djalālābād." <i>Encyclopedia of Islam, Second Edition</i>. Edited by: P. Bearman, Th. Bianquis, C.E. Bosworth, E. van Donzel and W.P. Heinrichs. Brill, 2009. Brill Online. TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN. 17 November 2009</p>	<p><b>ジャラーラーバード (Jalālābād جلال اباد)</b></p> <p>ジャラーラーバードは、アフガニスタン東部の都市である。ペシャーワールから東へ約 127 km、カーボルから西へ約 162 kmのカーボル河岸に位置する。</p> <p>ジャラーラーバード周辺の地域は、かつてサカ族およびクシャーナ朝下でガンダーラの王国（紀元前 6 世紀・11 世紀）を形成し、文化的・宗教的繁栄を誇った。また 7 世紀初頭には、玄奘三蔵がこの地について記録している。</p> <p>現在のジャラーラーバードはムガル帝国期にイスラーム史に現れ、アクバル大帝（1556 年 - 1605 年）が基礎を築いたと言われる。</p> <p>アメリカ人旅行家チャールズ・マッソンは 1826 年から 27 年に、ジャラーラーバードを訪れ、2 つの古い都市の姿を認めたと記述した。マッソンの訪問から間もなく、ジャラーラーバードはドースト・モハンマド・ハーン<sup>1</sup> に掌握された。</p>
 <p style="text-align: right;">Vol.2 口絵</p> <p>参考資料</p> <p><a href="http://www.kibou-school.org/afganhistory.htm">http://www.kibou-school.org/afganhistory.htm</a></p> <p><a href="http://www.mrrd.gov.af/nabdp/Provincial%20Profiles/Zabul%20PDP%20Provincial%20profile.pdf">http://www.mrrd.gov.af/nabdp/Provincial%20Profiles/Zabul%20PDP%20Provincial%20profile.pdf</a></p> <p><a href="http://www.longwarjournal.org/archives/2006/06/kabul_to_qalat.php">http://www.longwarjournal.org/archives/2006/06/kabul_to_qalat.php</a></p> <p>Charles Masson, <i>Narrative of various journeys</i></p>	<p><b>カラート (Qalāt قلات)</b></p> <p>カラートは、アフガニスタンの南部に位置するザブール州の州都である。カンダハールの北東へ約 200km、カーボルの南約 480km に位置している。</p> <p>紀元前 4 世紀にはアレキサンダー大王が、また 19 世紀にはイギリス軍が、アフガニスタン征服のためこの地を通った。</p> <p>マッソンは 1830 年にカラートを訪れた際、次のように記述している。</p> <p>『目の前に広々と広がる平原や丘、その向こうにくっきりと見える Chehel Tan のいただき、それらを眺めていると、小説の場面や未来への喜びが心に浮かんだ。こうしたことが、初めてカラートを見たという満足感をますます強めるのだった』</p> <p>その 8 年後の 1838 年、第一次イギリス・アフガニスタン戦争が勃発し、イギリス軍のカラート侵攻が始まった。</p> <p style="text-align: right;">(南・西アジア課程ペルシア語専攻 2 年 日下 涼)</p>

<sup>1</sup> ドースト・ムハンマド・ハーン (1793 年 - 1863 年 6 月 9 日) は、アフガニスタンの国王 (在位 1835 年 - 1863 年)。カーブルの統治者だったムハメッド・アジムの弟。バーラクザイ部族ドゥランニ族出身。アフガニスタンに侵攻したイギリス軍は、1839 年 8 月、カーブルを占領し、シュジャー・シャーを国王とすることができた。ドースト・ムハンマドは、中央アジアのブハラに亡命し、その後、帰還して再び抵抗するもののイギリスに敗れ、1840 年 11 月に投降して英領インドに連れ去られた。しかし、第一次アフガン戦争と呼ばれるこの戦争では、各地で侵略軍に対する反乱が勃発し、大損害を出したイギリス軍は、戦争の継続を断念せざるを得なかった。1843 年、イギリスは、ドースト・ムハンマドを解放し、彼は再び王位に戻った。



Vol.3 口絵

参考資料

南アジアを知る事典 (A/302/51147)

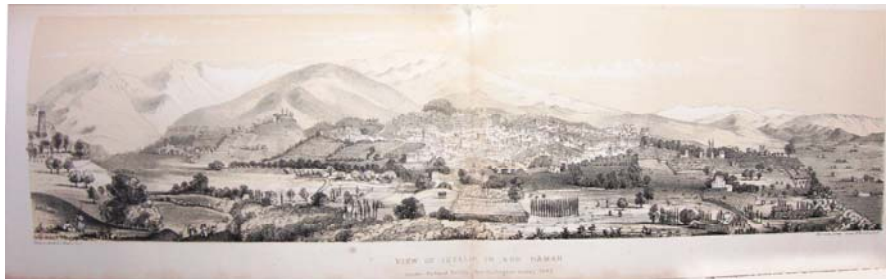
### バーミヤーン (Bāmiyān باميان)

バーミヤーンは、ヒンドークシュとコーヒババー両山脈の間の東西に長い渓谷中にあり、北はアフガニスタン・トルキスタンから中央アジア、東や南はインドに通じ、両世界の接点に位置した。

バーミヤーン川とその支流によって造成された礫岩大地の崖面に1kmにわたって約1000の6~9世紀の仏教石窟が残り、なかでも中心部石窟郡の東と西とにそれぞれ38mと55mの大仏立像を掘り出した巨大な龕(がん)は古来有名であったが、2001年夏にイスラーム原理主義を標榜する政治集団(ターリバーン)によって爆破された。

1835年初冬にこの地を訪れたマッソンは、この巨像に対峙し、現代でも重要とされる記録を残している。現在、もはや完全なる姿でこの巨仏を見ることはできない。しかしこれを見ることができたマッソンの感動はいかほどであったか、その高揚はマッソンの書き残したこの落書きにうかがい知ることができるのではないだろうか。

『こんなに高い洞窟にまで探検に来る物好きがもしあるとしても、チャールズ・マッソンが先にここに来たりしことを知るであろう』



Vol.3 折り込図

参考資料

Charles Masson, *Narrative of various journeys*

### イスターリフ (Istālif استالف)

イスターリフを訪れたマッソンは次のように記している。

『私たちは、丸い石ころがしきつめられた谷底を、白い泡をたてて小川が勢いよく流れていく深い渓谷とは逆側に腰をおろし、イスターリフの町のすばらしい眺めを楽しんだ。渓谷側は果樹園やぶどう園が生い茂り、それはまるで谷から町まですっぽりと包み込んでいるようだ。家々は渓谷の上り道にそって建ち並び、互いに上へ上へと屹立していく。(中略) イスターリフは想像しうる限りで、もっとも美しい場所のひとつだ。自然の美との融合が、これほど我々に完璧だと思わせるのか。町の家々は粗野だが、その美しさは傷つくどころか、むしろ増していく。風景全体との見事な調和！この国の景色は雄大だ。

この国にはこんなことわざがある—「イスターリフを見たことがない人は、何も見ていないのも同然だ」

私たちがそれ以上言うのは差し控えるけれど、イスターリフを見たことがある人間は、それに勝るような土地をいくつも見ることはないだろうということだけは信じてもいい。そして、同じくらいすばらしい土地も』

## Charles Masson 来歴

### □ 探検家 『チャールズ・マッソン』の誕生 1800-26年

チャールズ・マッソンは19世紀のイギリス人探検家・考古学者である。

マッソンは1800年にロンドンでジェームズ・ルイスとして生まれた。しかし、21歳でイギリス東インド会社のベンガル砲兵隊に入隊するまでの経緯はほとんどわかっていない。

さてマッソンは、ベンガル第一師団第三大隊の一員として6年間を過ごしたのち、1827年に軍から脱走して西へ向かった。この時以降、彼は脱走兵としての経歴を隠すため、世界を旅するアメリカ人旅行家『チャールズ・マッソン』と名乗るようになる。

### □ 遺跡調査 1827-33年

アフガニスタンに居を構えたマッソンは、数々の遺跡調査を行った。

最初は、1828年ペシャーワールからジャラーラーバード、カーボル、ガズニ、カラバード、カンダハールを巡り、そこからクエッタ、ボラン峠を経てシカルプールに至る約半年の旅であり、ほぼ文無し状態で徒歩の旅を続けるイギリス人(マッソン)は多くの場合アフガン人たちから好意的に迎えられた。

1832年カーボルに戻ったマッソンはアルメニア人街に居を定め、以後の精力的な踏査の手始めとして、アフガン軍に同行してバーミヤーンを訪れる。

1833年には、ベグラームの地において大量の貨幣を発見、ついで、ジャラーラーバード地域、特にハッダのストゥーパ郡と石窟の調査にとりかかる。

### □ 一転、諜報員に 1834-41年

マッソンが調査研究を行っている間にも、彼を巡る状況は変化していった。

ルディアーナに駐留していたイギリス軍秘密情報局のクロード・ウエイド大尉が、マッソンを諜報員として雇い入れてアフガニスタン情勢に関する正確な情報を得ようと計画。この時ウエイドはすでに、『マッソン』が脱走兵ジェームズ・ルイスであるという情報を入手しており、恩赦を条件として、彼を情報提供者とすることに成功した。

諜報員となったマッソンは卑劣な手段を用いるウエイドに嫌悪感を抱きつつも、アフガニスタン情勢を報告する。

1838年インド総督オークランドはアフガニスタン出兵を宣言するのだが、マッソンはその直前カーボルを離れ、ペシャーワールへ逃れる。そこで自らの著書の執筆に勤しむが、存命中のインド政府高官や行政官の実名をあげての批判が頻出するこの著書は、イギリスでの出版を拒否されることになる。

#### □ 囚われのマッソン

休養をとったマッソンは、旅を再開すべくカーボルを目指して、スインドからカラートへ向かう。ところが、カラートでブラーフイ部族の反乱に遭遇し、行政官ラブディ中尉とともに囚われてしまう。

マッソンは、イギリス軍との交渉のために解放されてクエッタに送られたが、同地の行政官ビーン大尉により、反乱軍を手引きした嫌疑をかけられ投獄されてしまう。その後どうにか釈放されたものの、この事件はマッソンのその後の人生に大きな影を落とすことになる。

ボンベイに到着後、マッソンはインド政府に対してカラートで奪われた所持品や原稿の賠償と、クエッタにおける不当な扱いへの謝罪を求めるが叶わず、訴追に本腰を入れるため、20年ぶりに祖国イギリスに戻るようになる。

#### □ 祖国イギリスへ 1842-53年

1842年マッソンは主著「Narrative of Various Journeys in Balochistan, Afghanistan and the Punjab」(本館請求記号 HUB/K/589350/1~4) 3巻本を、Richard Bently 社から出版した。また、1848年には26歳年下のメアリー・アン・キルビーと結婚する。一方、インド政府との交渉は不調に終わった。

カラートでの出来事以降マッソンはちょっとしたことにも過敏に反応し、しばしば根拠のない非難を他者に向けてようになったという。その後のマッソンの足取りはあまりよくわからない。

1853年11月5日、マッソン53歳で永眠。

彼の遺品は100ポンドでインディア・オフィスに買い取られ、そこの図書室に収蔵された。それらがカタログ化され、マッソンの生涯と事跡に光があたるようになったのはやっと1937年のことであった。

#### 参考文献

稲葉稜(2003)「紹介 Gordon Whitteridge 著 Charles Masson of Afghanistan」東洋史研究会【編】『東洋史研究』62(2) pp.350-354 政経書院



## 当時の社会・政治情勢

### イギリス植民地主義政策の展開とバローチェスターン

18世紀が終焉を迎え、19世紀の幕開けを見ようとするその時、奇しくもバローチェスターン周辺地域を巡る国際関係は俄かに慌しくなり、新たな激動の時代を迎えることとなった。

その直接のきっかけとなったのは、1798年、ナポレオン麾下のフランス軍によるエジプト侵攻であった。ナポレオンの狙いは、イギリスのインド支配に楔を打ち込もうとすることであり、そのための彼の構想は、「エジプト遠征の後には、ダニユーヴ河から南ロシアに入り、黒海からボルガ河に至り、同河を下って、アストラハンに出て、更にカスピ海を渡ってイラン領のアスタラーバード湾（現在のゴルガン方面）に上陸、イラン東部を抜けてヘラート、カンダハールを経てスィンド溪谷に侵攻する」という誠に壮大なものであった。

おりしも、当時、デリーをも脅かす勢いのアフガニスタンの国王ザマーン・シャーが、イギリスのインド支配に激しく抵抗していたマールワール地方のティプゥ・スルターンと同盟を結び、フランス軍に支援を求めている。ナポレオンはこれに応じてエジプトから両者に向けて支援の小部隊を派遣したのである。

こうして、それまではイラン高原地域にはさしたる関心を示さなかったイギリスが、インドに攻勢をかけるフランスへの対抗策として、俄かにガージャール朝イランへの接近を試みるようになっていく。かくして、ガージャール朝イランとの間、植民地インドの西方に近接する位置にあるバローチェスターンもイギリスの直接的関心の中に取り込まれていったのである。

当時のバローチェスターンの中心地カラートを拠点としたミール・ナーセル・ハーンの支配が、彼の死によって急速に衰えていった19世紀初頭に、バローチェスターンに入った最初のイギリス人のひとり、ヘンリー・ポッティンジャー（Sir Henry Pottinger）<sup>2</sup>は、この地がサルダール（部族長）の割拠状態であることを報告している。つまり、政治的には極めて不安定な状態にあった訳だが、正にこの頃から、次第にバローチェスターンへのイギリスの浸透が顕著となっていく。

そして、それを一気に加速させた事件が第一次イギリス・アフガン戦争（1838～42年）であった。

<sup>2</sup> Pottinger, Sir Henry [1789-1856]: イギリスの植民地行政官。初代ホンコン総督、喜望峰、マドラスなどの総督を歴任。【日外アソシエーツ・西洋人物レファレンス事典 II 近世編 下 (ホ～ワ)。日外アソシエーツ, p.1390, 1984.】

親露的姿勢をとるカーブルのドゥッラーニー朝バーラクザイ系国王、ドースト・モハンマドを退位させ、親英派の前国王シャー・ショジャーの復位を画策するイギリスが、カーブル制圧を目して起したのが第一次イギリス・アフガン戦争であった。イギリスは、カンダハールへの自軍の安全な進軍を確保するためには、その途中に当たるバローチェスターン地方を自らの管理下に置く必要性に迫られた。そのために、1839年にはカラートのミール・メフラブ・ハーンのもとにアレキサンダー・バーンズ卿 (Sir Alexander Burnes) が派遣され、カラートの主権と支配領域の保証および、街道の安全確保と糧食の提供に関する協定が成立した。

この時を以って、バローチェスターン地方の大部分はイギリスの影響下 (事実上は、管理下) に置かれることとなり、こうした状態は 1947 年にパキスタンの一州として独立するまで続く。

一方、19 世紀後半にイギリスは本国と植民地インドを直接結ぶ電信線敷設という大事業に乗り出す。それは、1857 年に突発したインド大反乱が大きな脅威となって押し掛かり、こうした不測の事態に迅速に対応するためには、本国と植民地の緊密なる連絡体制の構築が急務となっていたからであった。この敷設事業完遂にとって、大きな障碍のひとつとなったのが、サルダールが割拠し、治安状況が芳しくないバローチェスターン地方であった。

その主たる原因を当該地方に対する管理主権が明確となっていないことに見たイギリスは、インド=ヨーロッパ電信会社の総支配人であった軍人、F.J. ゴールドシュミットをこの地に派遣し、ガージャール王朝政府とイギリス領インド帝国との勢力圏の画定を行った (ゴールドシュミット裁定 : 1871 年、1872 年)。これが現在のイラン・イスラーム共和国とパキスタン共和国の国境となる。

1893 年には、英領インド帝国の外相モーティマー・デュランドが、アフガニスタン国王アブドル・ラフマーンとの間で条約に調印し、同王国と英領インド帝国との境界線を設定した。これがインドからの分離独立後、パキスタンに継承されることとなった。

こうして、主としてバローチ人が居住するバローチェスターンはイギリスの植民地主義政策の展開の結果として、現在は、三つの主権国家に分けられた状態で存在することを余儀なくされているのである。

(東京外国語大学教授 八尾師 誠)

## その時、日本は

「ジェームズ・ルイス」がイギリスで産声を上げた時、日本では、志筑忠雄の『鎖国論』<sup>3</sup>が出版され、「鎖国」という言葉が使われ始めた。時は1801（寛政13、享和1）年、11代将軍・家斉の時代である。

鎖国の傾向がはじまったのは、豊臣秀吉が1587（天正15）年キリシタン禁令を発したことに遡るが、江戸幕府の鎖国政策は1641（寛永18）年に3代将軍・家光が完成したといわれる。平戸のオランダ商館を長崎出島に強制移転させ、外国船の入港はほとんど長崎に集中させた。すでにポルトガル人は1639（寛永16）年に排除されていたので、貿易相手国はオランダ・中国のみとなったのである<sup>4</sup>。

19世紀に入ると、外国船の出没が活発化してきた。1803（享和2）年、アメリカ船が長崎に来航、1804（文化元）年にはロシア使節レザーノフが長崎に来航し、通商を求めたが、江戸幕府はこれを拒否。1808（文化5）年にはフェートン号事件<sup>5</sup>が起き、幕府は海防を強化、1825（文政8）年には諸大名に「異国船打払令」を発令し、鎖国体制を崩そうとはしなかった。

しかし、第一次アフガン戦争が勃発した1838（天保9）年の蛮社の獄<sup>6</sup>のように、鎖国政策に対する批判は、内外で強まっていく。1842（天保13）年にはアヘン戦争が終結し、南京条約が締結された<sup>7</sup>。こうした批判や西欧列強のアジア進出による情勢変化を受け、同年、江戸幕府は「異国船打払令」をやめ、「薪水給与令」をだして外交方針を転換、外国船を穏便に取り扱うことにし、食料・薪水の給与をできることとした。

そして、マッソンが死去した1853（嘉永6）年にペリー来航、1954（安政1）年に日米和親条約が締結された。同年、欧米諸国と開国の諸条約を締結し、日本は開国と相成る。

こうしてみると、マッソンが生きた時代は日本にとって運命的な時代だといえる。彼が活躍したころ、江戸幕府では鎖国体制がゆるぎ、開国に至り、さらに幕末という激動の時代を迎えていたのだ。

### 参考文献

- ・名島太郎. 解説日本史年表. 東京, 名島太郎, 2006.
- ・飯田鼎. 英国外交官の見た幕末日本. 吉川弘文館, 1995.
- ・楠木誠一郎. 日本史・世界史同時代比較年表. 朝日新聞社, 2005.5
- ・樺山 紘一. 世界の旅行記 101 History handbook. 新書館, 1999.
- ・デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ・日本大百科全書, ジャパンナレッジ

<sup>3</sup> 1727年に刊行された、ドイツ人旅行家・博物学者のエンゲルベルト・ケンペルの著書『日本誌』の1章の抄訳。

<sup>4</sup> 江戸幕府がオランダ国王親書への1845年6月1日付返書に記したところによると、「鎖国」について、「朝鮮・琉球を通信の国、オランダ・中国を通商の国」と規定している。

<sup>5</sup> イギリス軍艦フェートン号は、ナポレオン戦争に関連し、オランダ船を拿捕するため、オランダ国旗をかかえて長崎に侵入、オランダ商館員を逮捕した。しかし、オランダ船は入港していなかったため、こんどはイギリス国旗をかかえて薪水を要求した。長崎奉行・松平康英は、警備弱体のためこれに応じた。フェートン号はオランダ商館員を釈放し、長崎を出港したが、長崎奉行は引責自刃した。

<sup>6</sup> 1937年に起きたモリソン号事件（アメリカ船モリソン号が漂流民を護送して浦賀に入港したが、浦賀奉行が砲撃、退去させた）について、1839年、渡辺華山や高野長英が幕府の異国船打払い政策、海防政策を非難。幕府は2人を含む蘭学者を幕政批判の罪で処罰した。「蛮社」は洋学仲間の意「蛮学社中」の略。

<sup>7</sup> アヘン戦争は、1840-42年にイギリスと中国（清）との間に勃発した。南京条約とこれを補足する「五港（広州、廈門、福州、寧波、上海通商章程）（1843年）ならびに「虎門寨追加条約」（1843年）によって、中国は領土の一部（香港と開港場の一面に設けられた租界）と関税自主権、司法上の主権を失った（領事裁判権の承認）。さらに、片務的最恵国待遇を与え、没収アヘンの代価と軍事費を内容とする巨額の賠償金を支払い、開港場におけるキリスト教布教を認めることになった。

	<p><b>食事</b></p> <p>初老の男女七人の食事風景。一見して思うことはどのようなつなりの人たちだろうかということである。膳の二皿の中の菜はたっぷりだし、箆に入れた飯も十分ある。身なりは上等ではないが、貧しくはない。演出とはいえ、不思議な感じの七人である。</p> <p style="text-align: right;">—</p>
	<p><b>髪結い</b></p> <p>髪結いは月代をそり、髪型をととのえる男の職人で、その仕事を床を床といったことから、後に「床屋」という言葉が生まれる。髪結いには、店を構えた者と、鬢盥という道具箱をもってまわる丁場回りとよばれる者がいた。図は後者で、両側においた箱が鬢盥である。</p> <p style="text-align: right;">二</p>
	<p><b>踊り念仏</b></p> <p>太鼓や鉦(かね)を打って、踊りながら一心不乱に念仏する空也念仏。空也念仏は、平安中期に空也上人が始めたと伝えられ、極楽往生が決定した喜びを表してひょうたん・鉢・鉦などをたたきながら、節をつけて念仏を唱えて踊り歩くもの。</p> <p style="text-align: right;">参照：デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ</p> <p style="text-align: right;">三</p>
	<p><b>飛脚</b></p> <p>手紙・金銭・小荷物などの送達にあたった者。古代の駅馬に始まり、鎌倉時代には鎌倉・京都間に伝馬による飛脚があったが、江戸時代に特に発達。幕府公用のための継ぎ飛脚、諸藩専用の大名飛脚、民間営業の町飛脚などがあった。明治4年(1871)郵便制度の成立により廃止。</p> <p style="text-align: right;">参照：デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ</p> <p style="text-align: right;">四</p>
	<p><b>日本橋</b></p> <p>江戸幕府は五街道を設定し、その起点を江戸の日本橋とした。供を従えた侍、芸人、内儀、また、近くに河岸があるため、大きな魚を肩において渡る男たちもいる</p> <p style="text-align: right;">参照：デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ</p> <p style="text-align: right;">五</p>